

線路は続く

楡木啓子

「あれは、ビルだ」

孝子はゆつくりと運転席を見た。すでに智之の視線はビルからはなれ前方にある。その横顔は結婚から二十九年という年月を刻んでいるものの、表情の乏しいところは今も変わりが無い。慢性疾患を抱えているかのようになり、どんやりとした顔で起き、洗面をすませ、うつむきがちに食事を終えると、判で押したように七時半には家を出る。その間に気の利いたことはおろか、おはようの言葉さえ出し惜しみをしている男の顔である。ただ、ほんの些細なことでも顔は不機嫌の権化に変わるのだ。

前方の信号が青に変わり車が動き始めた。いつものように腹の中でひとつため息をついた。が、孝子のふつふつは

むべくもないが、そんなものだろう。

問題のビルはすでに後方に遠ざかっていた。が、今日のふつふつはたちが悪かった。駄目だ、言っては駄目だという年季の入った理性の制止も空しく、孝子の口から自分でも驚くほどの低い声が出た。

「喧嘩を売る気？」

言われたことの意味が分からないまま、智之の口がへんの字を書く。それを目の端に捕えながら、孝子は抑制がきかなかった。

「あれが、小屋でも、家でもないのは誰だって分かるの。『あれ、何かしら』と言うのは、『あのビルはいつた何かしら』ってことでしょ。あなたの返事は、喧嘩を売るときか、冗談以外にありえないの」

喧嘩を売ってきたのなら、それこそ大歓迎である。

「人が親切に教えてやってるのに、おまえは性格が悪い」
孝子は腹の中で長いため息をついた。

言っても無駄なことは結婚生活の年月ぶん、いやと言うほど分かってはいたはずだ。

式を挙げてまもなくのころ、世話になった人々への挨拶回りのため菓子屋に立ち寄った。そこに、おそらくはディスプレイ用なのであろう、今まで見たことのないほど大きな紅白饅頭が店頭に置かれていた。「うわあ、あれ見て」

それでは収まりそうになかった。

ローンの相談に赴いた銀行を出てしばらく走ったところで、前方に壁も窓も青く光る十五階建てほどのビルが見えた。それが、見ようによつては不気味であったため普通の会社とも思えず、「あれ、何かしら」と孝子が声を上げ、それに、「あれは、ビルだ」と智之が答えた。無論、冗談などではない。

いつものことだ、珍しくもないじゃないかと己に言い聞かせようとするのだが、もう一人の自分がそれを押しつけた。「あれは、ビルだ」とはなんだ。六十三歳の夫が妻にいう言葉か。祖父が孫に言う台詞ではないか。あいにくと子供は授からなかったから、そうしたのどかな光景など望

と言う孝子に、智之は厳かに言った。

「あれはね、紅白饅頭といって、祝いの」

智之、三十四歳、孝子、二十九歳であった。慌ててその場を離れようとして、孝子はショーケースにしたたか足を打った。

智之が幼いころから神童と言われたというのが仲人口でないのは、そのはなばなし経歴が物語っていた。結婚する前に智之の実家である鎌倉の家を訪れた。初めからそういう手はずになっていたものか、智之は恩師に会うと言って出かけ、孝子は座敷で義母と二人になった。義母は床の間から二つの桐の箱を掲げるようにして持つてくると、おもむろに卓上に載せた。ひとつは西條家の系図であり、もうひとつが智之の小学校からの成績表である。長々と西條家の履歴を聞かされ足のしびれも頂点に達したころ、その成績表が披露された。一番で入学、一番で通し、一番で卒業が、東大を卒業するまで続くにいたっては、未来の伴侶に対する尊敬よりも、とんでもないことになったという居心地の悪さの方が勝っていた。あなたも智之に劣らない子を産み育てなければなりませんという義母の声を聞きながら、孝子は心中ひそかに、自分の成績表は紛失したことにしなければと思った。

それが、なんのことはない。蓋を開ければ紅白饅頭である。いや、それ以前に十分すぎる兆しはあったのだ。

結婚式は鎌倉になるものと覚悟を決めていた孝子だったが、ごく内輪の親戚だけの食事会というのを鎌倉ですませ、あとは東京で自分たちの好きなようにと西條家から智之を通して申し出があった。思いのほか進歩的であったことに、気に病むほどでなかったのだとほっとしたが、後になって、それが単なる経済上の問題と知った。旧家には孝子には計り知れないほどの体面というものがある。地元で婚礼の儀式を執り行うにはそれ相応のものが必要であった。格上の家から嫁をもらった長男の婚儀と、その嫁の縁に繋がる大家の長男と祝言を挙げた一人娘の嫁入り支度で、西條家の財も底をついたというのがほんとうのところであった。東京ものは勝手に、まあ、次男だから許しましたという体裁のもとに、ていよく切り捨てられたのだ。孝子の両親がすでに他界し兄のもとに身を寄せているというのも、代々教職にあったというほかはさしたる家柄ではないというのも、軽んじられる理由であったのだろう。

それでも、二人の裁量でことを進められるのを孝子は幸せに感じ、兄にも迷惑をかけなくてすみそうだと安堵した。智之と二人で式場を探すことから始めた。自分たちの手元の資金を考えて中堅どころのホテルへ出向いた。案内された一角には華やかなウエディングドレスや引き出物が展示されており、孝子の胸はその日着ていた淡いピンクのスー

ツの下で甘く膨らんでいった。隣に座る智之も押し出しがよく、表情の乏しい顔つきも、見ようによってはいかにも学者然としており、まだ数回しか会っていない相手のことを、肩がこりそうなほど面白くない人と決めつけていたことを申し訳なく思った。係りの男が二人の前に座り、型どおりの問い合わせが始まった。式はいつごろを予定しているのか、出席者の人数は、予算はいかほどに、すべて返答に戸惑うような内容ではない。が、驚いたことに智之は宙を見据え、あー、えーと言うだけであった。たまりかねて、孝子が助け舟を出した。

「六月ころよね」

「五十人くらいだったかしら、ね」

智之は救われたようにその都度ちいさく頷いた。こちらからもおおよその事を尋ね、男が慇懃無礼とも思える挨拶を口にしての立ち上がりざま、小馬鹿にしたような視線をちらりと智之に投げかけた。

新婚旅行先を高知と決めたのは智之である。ついでに変成岩の何とか構造を見たいというのがその理由であったが、ついでなのは旅行のほうだろうと孝子は思っていた。行きたいところがあるかと智之は問わなかったのだ。たとえ聞かれたとしても、孝子は相手の意に沿うつもりであった。が、妻となる女の気持ちの思い量ろうとする気配はおろか、その女にも意思があるという当たり前のことすら智之には

考えつかないようであった。それでも、いつもと変わらな自分の専門分野への旅なのだ。今度ばかりは式場のときとは違い、智之にとつて造作のないことであろうと、孝子は踏んでいた。ところがそれまでが人任せであったものか、飛行機、ホテル、そのどれを決めるに当たっても、智之ははっきりとした態度をとれぬまま、またも孝子が口を開くことになった。相手が若い女性であったため、その遠慮のない視線におおさら孝子は惨めだった。これでは見ようによつては、いやがる男を捕まえ、無理矢理結婚までこぎつけ、鼻面を引き立てて旅行の相談に来たと見えなくもない。あの一日だけで、十年も歳をとつたような気がした。

ビルの横を通り過ぎたときには陽もそれほど傾いていなかったのが、すでに車の中も外も薄ぼんやりとしていた。あれから智之は黙ったままである。先ほどよりへの字の山は高くなり、孝子が何か言おうものならと待ち構えている風である。

智之の痲癩の虫を起こしてしまった。

初めてそれを見たのは、新婚旅行から帰り、一月ほどたつての朝食ときだった。供に食事をするようになつてから気になっていたことを、孝子は思い切つて口にした。

「気づいてる？ くちやくちやくって音、たててるの。直した方が」

終いまで言い終わらないうちに智之は孝子を睨み付け、おまえは茶碗の洗い方がさつだ、水を出しっぱなしにするな、ワイシャツのアイロンの当て方がまずい、昨日は夕飯が五分遅れたと、大声でわめき始めた。のしる智之の前で孝子はうなだれていた。誰でもが一言言われたくないところを突かれたのだ。言うべきではなかったと、わびようと頭を上げ、孝子は智之の次の一言に凍りついた。

「いいか、これからはおまえが食べるたびに、耳澄まして聞いてやるからな」

智之の形相には売り言葉に買い言葉ではすまされぬものがあった。自分が恐れていたものはこれだったのだ。結婚してからいくらもたないうちから、何かの折に智之が自分に向ける痲癩性なしぐさや苛立ちに、孝子は戸惑い不安に駆られた。その漠としていたものはこれだったのだ。外観からは想像もつかないほど智之は子供であった。旧家の次男という立場への気遣いくらいはあったであろうが、それでも秀才の坊ちゃんとして大事にされるうちに、勉強より大切なものが育たなかったのだろう。自分の放つた言葉がどれほど孝子を打ちのめしたかも分からぬまま、苦虫を嘔み潰したような顔をして食事を済ませると、智之は研究室へ出かけ、さらに不機嫌さを増して戻ってきた。そのままた十日もだんまりを続けていた智之だったが、そうもしていられない事態になった。恒例の新婚さんのお宅訪問であ

る。研究室の先輩後輩が十名ほど次の日曜日に来ると、智之はあちらを向いたまま告げた。俺は不機嫌なんだ、が、今回はこれで終わらせてやると、その背中が言っていた。「いやあ、奥さん、料理上手ですねえ。今度うちのにも教えてやってくださいよ」

「奥さん、西條君ほど研究熱心な室員はいないですよ。純粹でねえ、いまだき珍しいやつですよ」

どの言葉にも智之はニコニコと頷いていた。孝子が驚くほど上にも下にも智之は最大限の気配りを欠かさず、客たちも上機嫌で帰っていった。最後の客が玄関の戸を閉めると、智之の顔つきが一変した。後片付けをしながら話をしようとした孝子に、

「うるさい、疲れてるんだ」

そう怒鳴りつけると、立ちすくんだ孝子を尻目に、さつさと風呂へむかった。

不機嫌の蒸し返しでないことは分かっていた。孝子に見せる顔からは想像もつかないことだが、智之は恐ろしく人に気を遣う。どの人からも良い人と見られなくては気がすまないのだ。見栄っ張りというより気の小ささによるものだった。強迫観念と言ってよいほどそれは強かった。そのため智之は疲れ果て、捌け口が必要であり、それが自分なのだ。孝子は感じていた。片づけを済まし、風呂へ入り、布団に体を滑り込ませたときには、孝子は心身ともにぼろ

ぼろであった。客にも智之にも満足してもらうために、献立から飾る花にいたるまで出来るかぎりの心配りをしてきた。褒め言葉など望めないにしても、ねぎらいのひとつくらいあってもよいだろう。怒りよりも空しさが先にたつた。涙が滲み出そうになり、孝子は目に力を入れて天井を見据えた。

枕元に置かれた上向きの電気スタンドの弱い光を受けて、幅広の合板にどういう加減で出来たものか、二本、刷毛でなぞったような線状のシミが浮かんで見えた。それはちょうど孝子の頭の上から対角線上に延びており、先のほうは闇に吸い込まれていた。築三十年の家を借りるにあたって腹の突き出た大家から、あちこち修繕し、たいそう金が必要だと自慢ともとれる話を聞かされたが、天井までは手が届かなかつたのだろう。隣で眠っていた智之がうーんと大きく伸びをし、片方の手を孝子のほうへ落としした。次いで、無言のままもう一方の手で自分の掛け布団をめぐり上げた。

薄明かりの下で、智之の目が早くしると促していた。さすがにこのままではまずいと思ったものか、ひと眠りし客を迎えた昂揚が蒸し返されたのか。どちらにしろ、大声で悪態をつき、その手を振りほどいてやれたらどれほど気分がよいだろうと思ってみても、そのあとのはかり知れない軋轢あられきを考えたととき孝子の気持ちは萎えた。

孝子の小さな体の上に、智之が覆いかぶさっている。

智之の肩越しから、天井の二本の線が見えた。

——線路は続くよ どこまでも

野を越え山越え 谷越えて

メロディーがゆっくりと流れていった。

あれから二十九年が過ぎた。長い年月である。孝子も黙って過ごしたわけではない。若いころには華々しい戦いを挑んだ時期もあった。が、孝子は知ったのだ。

喧嘩は出来る相手と出来ない相手がいる。

鎌倉から孝子へは始終呼び出しがかかった。それは入院する舅の付き添いであったり、今は亡き舅の母親の世話だったり、衣更えの手伝いだったり理由は様々だったが、「行ってきます」と言う孝子に、そのつど智之は「ああ、行っていいよ」と答えた。「頼むね」でもなければ「ご苦労だね、すまないね」でもない。「行っていいよ」である。それが幾度めかになったとき、どうしてそう言うのかと孝子が尋ね、

「おまえがいなかったら俺が不便になるんだから、あたりまえだろう」

何を言っているのかという顔をして智之が答えた。

喧嘩はできないのだ。

だから、いつからかは覚えていないが、なぜか尻尾のところから「テキサス決死隊」となってしまう。線路は続くよ

を歌って、景気をつけてきたのだ。テキサス決死隊なのだから、帽子をかぶったガンマンか、軍服を着た兵隊というところであろう。が、孝子の頭の中では、鉢巻をきりりと締めた孝子が口を一文字に結び、仁王立ちしていた。子供のころのテレビ番組「テキサス決死隊」の主題歌が、「線路は続くよ」と同じ旋律と知ったのはずっと後のことだった。

「喧嘩を売る気」といままさら孝子が言ったのには、銀行で

大家からの申し出を受け二十年前にそれまで借りていた家を買ったのが、今年の春ローンが終わったところで、外壁に亀裂が入り、台所の水周りも怪しくなってきた。外壁は長い目で見ると修理をするより張り替えた方がいいだろうとなり、台所の方も水道管を新しく替えなければという話だった。

六十三歳とはいえ、幸いなことに国立大学の定年後も私立大学の教授となり、智之は今も現役である。ローンを組むのに支障はなかった。手持ちの金もあることから借入金も少なめにして、金利の安い短期の確定金利で返してしまおうと孝子が言い、智之は長期で借りと主張した。それでは金利が高くなり結果的に支払いが多額になる。金がないのならいざしらず、わざわざ損をすることははないと思う

のだが、結論は銀行へ行ってみてとなった。孝子は気が重かった。行員が何と言おうとも智之は思うようにするだろうし、案の定そうなった。智之に確たる考えがあつてのことではない。二人の歴史がそうさせたのだ。二人で式場を探しに行った日からそれは始まったのだと孝子は身にしみて感じていた。

あれ以来、面倒なことは一切切孝子の役割であつた。手違いが生じると智之は鬼の首でも取つたように言い立てた。そのくせ孝子が次第に慣れ、手際よく捌くほどに、いつからか智之の機嫌が悪くなつた。うがつた見方をすれば、孝子の失敗を待っている節もあつた。おかしな話である。一軒の家は言わば一艘の船である。舵取りが二人いるのなら、助け合つてとつていくとよい。片方が片方の失敗を望むなどもつてのほかで、時には命取りになる。後ろに隠れ、こちらの背を押しておきながら相手がやりおせても、そうでなくても、機嫌が悪くなるのであれば、いよいよ孝子が、「それなら自分でしてちょうだい」

「なに！ ああ、やつてやる。やればいいんだろう。その代わり大学へ行つて働いて来い！」

あの時のもいづものように智之なりの理屈で喚きちらした。一軒の家に、そうそう大きな決定事項などあるわけではないが、それ以来、たまに智之が交渉の場に顔を出すように

なつた。同席し、孝子の考えを引き出したうえで、だいた

いがその反対のところを持ち出すのだ。振れかげんがいかに智之らしく、その流れが今日の結果だつた。いつまでこんなことを繰り返すのかと、孝子の忍耐力もあやしくなつていた。何のための夫婦なのか、あまりの馬鹿馬鹿しさに腹の虫が治まらなかつたのだ。それでも、自分の言つたことで立ち上がった波風を考えると、孝子の口から小さなため息がでた。家まであと二駅くらいというところで、救急車のサイレンが聞こえ、智之が路肩に車を寄せた。

孝子の目を向けた先に、一軒家の間口を広げたほどの小さな鉄工所が見えた。仕事を終える時間なのか、電灯の明かりの下で、がっちりした体格の男がなにやら片付けらしきことをしていた。

心臓がバクリと音を立てた。

あの時の男だつた。

ひと月ほど前だつた。スーパーへ行つての帰り道、自転車に乗っていた孝子は走り出てきた子供を避けようとして、派手に転倒した。横倒しになつた自転車のカゴから飛び出した豆腐は歩道にぐしゃりとたたきつけられ、芋やにんじんが飛び散つた。

「大丈夫か」

声をかけられ、大丈夫ですと答え立ち上がるとしたも

の、打ちどころが悪かつたのか、孝子はその場にへたり込んでしまつた。

「動かない方がいい。ほら」

男がしゃがんで背中を向けていた。おぶされと言うのであろうが、孝子は慌てふためいた。ほんの小さなところに一、二度父親におんぶされた記憶があるものの、大人になつて、しかも見ず知らずの男に背負ってもらうなど、とんでもないことである。

断ろうとする孝子に、

「車あるけど、そこ、病院だから」

男は斜め前に立つ病院を指し、有無を言わず、ひよいと孝子を背負つた。男の厚みのある筋肉が、歩くごとに孝子の胸にぶつかった。智之とは違う、肉体を使って仕事をしている男の背中だつた。汗ばんだシャツも、妙に甘酸っぱい匂いも、痲性な孝子には珍しく、いやではなかつた。それどころか、自分から体を強く寄せたくなり、孝子はうろたえた。

「あまり無茶に走らないほうがいいよ、じゃあ」

男は待合室に孝子を座らせ、そう言いおいて去つていった。その背中を見送つてから、孝子は男の名前を聞くことはおろか、礼さえも言つていなかったことに気づいた。治療を終え外に出ると、自転車が病院の看板の下に置かれていた。カゴの中に、芋もにんじんも収められていた。

その夜、天井を見上げながら、孝子は男のことを考えていた。

男の首は太く、肩の筋肉は盛り上がつていた。年のころはちようど智之と孝子の間くらいだろう。孝子を軽々と背負うと、現実にはそうでなかつたのに、歩きながら男は振り向き、孝子に大丈夫かと言つていた。夢なのか、現との狭間にいるのか、孝子は男の目をみていた。男の目は隣家の犬にそっくりだつた。ハスキー犬にしては丸い穏やかなところが、男に似ている。背負われている孝子の顔は、もやがかかつたようにぼんやりしていた。

車が動き出すまでの少しの間に、「川田鉄工作所」という看板と、建物の壁に打ち付けられた所番地を、孝子はしっかりと頭に刻み込んだ。男の名は川田というのだ。名前と所在が分かり、孝子の胸は騒いだ。サワサワと立ち上がる音に押されて、智之のことは頭の外に出ていた。家に戻つてからもどこか上の空の孝子に、勝手が違うのか拍子抜けしたのか、智之のほうも静かであつた。なかなか眠れないまま朝も白むころ、孝子はまた男の夢を見た。だいたいが前と同じである。違つたのは今度は自分の顔はつきり見えたことだつた。孝子の口は半開きになつていて、あの女の顔と同じだつた。また孝子が小学校の二、三年生のころ、祖母の家にあずけられたことがあつた。隣に未亡人が住ん

でいた。外で石蹴りをしていると、男ともつれるようにして女が出てきた。女はどこかゆるんだ風情で男を見送っていた。

「いやだね、真昼間から」

祖母は孝子を家の中に追い立てながら、吐き捨てるように言っていた。玄関に足を入れながら、首を回して孝子は女の顔を盗み見た。夢の中の孝子の顔はあの女の顔だった。ワーツという自分の声で目が覚めた。上体を起こし、額の汗をパジャマの袖で拭った。

隣で智之が、なにやらぶつぶつと言い、体をあちらに向けた。

孝子は自分を持って余していた。あれから、何をするのに心ここにあらずなのだ。洗って拭いたはずの茶碗をまた洗い、掃除機の先は同じところを何度も行き来していた。風呂の水を洗濯機へ入れながら溢れさせてしまったとき、孝子は家を飛び出していた。どうしようもないから、行ってもなかった。このままではどうしようもないから、行ってみれば、どうにかなるだろう。そんなところだった。頭の中には川田鉄工作所という名前も住所もしっかり入っている。

男の家を探すうちに小雨が降ってきた。朝からどんよりとした空模様であった。金物屋の店先で安物の傘を買い、

そうな肉がむっちりといっていた。斧を持たせたら、足柄山の金太郎のようなのだ。風邪など引きそうになかった。

それでも、男は空を見上げていた。

孝子は雨の中を歩き始めた。涙があふれて、流れ出した。早くに亡くなった父親が、孝子を膝に乗せ、孝子は小さなフランス人形だと言って頭をなでてくれた。フランス人形はテキサス決死隊になって、金太郎に負けるのだ。金太郎のように優しく扱われないのだ。どこかで自分は大事なものを落としてきた。もう取り返しがつかない、人生の終盤に足を踏み入れているのだ。さらに強くなった雨音に隠れて、傘の下で孝子は声を上げて泣いていた。

あれから、男に会いたいという気持ちには孝子の中から抜け落ちていた。

代わりに、体のどこかにある重い蓋が音を立てて開き、それまで無理矢理押し込められていたものが顔をつきだしてこんなものさと嘔くこともできなくなった。道は他にもあったのだ。いや、そんなことはとうの昔に分かっていた。ただ、蓋の下に閉じ込めて、知らんふりをしていただけなのだ。むくむくと湧き出てくるものを持って余しながら、それでも表向きは変わらない孝子と、これも変わらない智之との生活が続いていた。

数分歩いたところで、孝子は慌てて駐車している車の陰に隠れた。道路を挟んだ向こうに川田鉄工作所はあった。中で男がこちら向きに座り、下を向いて作業をしていた。傘を差しているのだから孝子の顔は男からは見えないうし、見られても、あの日の礼を言うだけである。隠れる必要などないのだと思い、孝子は気づいた。自分の中に、菓子折りの一つも持って挨拶に行くという考えなどなかった。ただ、もう一度男に会いたかったのだ。

傘の下で孝子はじっと男を見ていた。男は時おり空を見上げている。見上げてはまた作業をし、また見上げていた。雨脚が強くなると、男の空を見る度合いが増えた。腰を浮かして、外をうかがっている。誰かを待っているのだと気づいた。

男の動きが止まった。大柄な女が自転車飛ばしてきたのだ。

「うわあ、やっぱり降ってきたね、父さん」

そう言いながら駆け込んできた妻に、男は傍らに置いてあった真っ白のタオルを投げ、下を向いて仕事の続きを始めた。

妻はせわしなく体を拭きながら外での出来事でも話しているのだろう。そのうち、男が何か言い、妻は笑いながら奥へ入っていった。着衣の上からでも男の妻がかなりの太り肉であるのが見て取れた。二の腕も、胸も腰も太腿も硬

十月も半ばになって、鎌倉から電話があった。冬になる前に蔵の中を片付けたいので、週末に来るようという話だった。まだまだ豊饒かきしゃくとしている姑の物言いは智之と結婚したところから少しも変わらない。こちらの予定を聞くでもなければ、申し訳ないけどの一言も添えられない。有無を言わずにぬというのがいつもである。腹の中でお見事と言って、孝子は笑い飛ばすことにしていた。着いてみると、舅姑のほかに、母屋と地続きに家を立てて住む兄夫婦、やはりそう遠くないところに居を構えた義妹が、居間でくつろいでいた。茶を一杯振舞われ、整理に取り掛かることになった。

「あ、いいのよ、美知子さんは」

姑の言葉にそうですかと答え、腰を浮かせた兄嫁が座りなおした。初めからそのつもりであったのだろう。兄嫁はエプロンもしていなければ、その服装は働くには到底適したものでなかった。

「ねえ、蔵の中に柿右衛門の皿があるでしょう、お祖母さまが大事にしていた。私、あれ持って行くわね」

傍の者の思惑などおかまいなしに言っただけの義妹は、立ち上がろうともしなかった。

智之は舅や義兄と話しこんでいる。結局姑の後をついて蔵へ行ったのは孝子だけである。その姑も、蔵の中には入ったものの、あれこれ孝子に指図をすると戻っていった。

お見事。こうまではつきりと分け隔てられては、笑うしかないのだ。釣書が判る見合いでありながら、智之の相手として孝子を認めたのは、こういうことだ。初めから分かっていた。とにかく今はこの仕事をやつける他ないのだと言いつけながら、あの雨の日以来こらえ性のなくなつた自分を孝子は必死にだめていた。黙々と立ち働かうちに、気持ちも落ち着いてきた。箱が乱雑に積み重なり見苦しかった蔵の中はいくぶん趣を取り戻していた。中身がすぐ分かるように箱の表にシールを貼っておいたので、これからは取出しにも手間が掛からなくなるだろうと孝子は満足だった。昼時になつたら母屋へ戻るようにと言われていたのを思い出し、仕事を切り上げ孝子は皆のいる居間へ行った。食卓にはすでに昼の用意が整えられていた。

「あ、ちよとど呼びに行こうと思つたのよ」

兄嫁はそう言ったが、皆が孝子のことを忘れて談笑していたのは、ばつが悪そうな様子から見明らかだった。気づかないふりをして智之の隣に座るうとして、畳の上に置かれた開いたままの古いアルバムが目に入った。手にとつて見ると、義兄の結納の写真だった。兄嫁の実家の和室なのだろう。立派な床の間に、これも立派な結納飾りが鎮座していた。九品の結納品には、それぞれ立体的で飾りも華やかな水引がついている。それらを載せた白木の台は二つあり、高さも高く、その幅は長く、床の間を狭く見せ

ているほどだった。結納飾りが隠れないようにして、両家の人々がかしこまった顔を作っておさまっていた。

「それにしても、ずいぶんと貧弱ね、七品しかないわ。あ、でも、お婚様の肩書きが立派だからいいわよね」

孝子の結納の日、西條家を代表して訪れた智之の叔父が帰り、ひと息ついたとき兄嫁の淑恵がこう言い、兄が目で制した。それまで結納飾りに色々あるなど知る由もなかった孝子だったが、仕事帰りにデパートへ行き、淑恵の言うことはこういうことかと、納得して帰ってきた。結納飾りは七段階あり、孝子がもらったものは一番下か、その上くらいのものであった。台も小さく、飾りと言うより、結納セットと名づけたような嵩かさの小さな邪魔にならない品だった。それでも、床の間にうつ伏せしているように見える結納飾りを、淑恵が言うほどひどいものとは思わなかった。ただ、あつかいの違いは結納飾りだけでは済まされなかったのだ。あれから綿々と、このどうしようもない人々に馬鹿にされ続けてきたのだと、孝子の体が熱くなった。

「おい、何ぐずぐずしてるんだ。箸が出てないぞ、気が利かないな」

智之が孝子を睨みつけていた。くすぶっていたものが一気に爆発した。

「ざけんじゃないよ」

ずっと前にテレビで女優がこう言うのを見てから、一度

言ってみたかったこの言葉が、孝子の口から飛び出た。こうなると、もう止まらなかつた。本当に働く気があるのならピラピラした服で来るなど兄嫁に、兄嫁が働いているのに平気な顔をして座っているなど義妹に、人に物を頼むときはお願いしますと言うものだと、これは姑に、啖呵をきっていた。

座はしんとなり、どの顔もありえないものを見たような驚きに満ちていた。顔を紅潮させた智之は口をゆがめて苦しきっている。その智之の顔を睨みつけ、自分の女房だけがこんな扱いを受けているというのに、なんとも思わないのかとどなり、孝子は部屋を出た。

次の間に置いてあつた上着とバッグを持ち、玄関に向かった。ちよとど靴を履き終えたとき、智之が走ってきた。

「戻れ、戻つてみんなに謝れ」

「何を」

「怒ることないだろう。いつもと同じじゃないか」

気が付くと智之の頬をおもいきり引っぱっていた。駅に向かって歩いた。今も、これからも、智之は白いタオルを放つてはくれないのだ。そう思いながら、ずんずん歩いた。

途中、足音が聞こえたような気がして民家のガラス戸に目を向けたが、孝子の後ろには人っ子一人、猫の一匹もいなかった。微かに自嘲の笑みを浮かべ、さらに足早に歩いた。

東京の家に戻り衣類を鞆に詰め始めた。行くあてはなかつた。二、三人の親しい友の顔が浮かんだが、余計な騒動を持ち込めるような付き合いではない。考えるまでもなく、早くに両親を亡くした孝子には結婚してから疎遠となっている兄のところしかなかった。

孝子の手が止まった。何の前触れもなく現れた妹に、兄夫婦はどんな顔をするだろう。

「今晚泊めて」とどんなに軽く言つても、兄は心配し、淑恵はすばやく火の粉がかからない算段をするだろう。

結婚式をひと月後に控えて初めて不安を声に出した日の、淑恵の乾いた眼差しが思い出された。

智之と二人で式場の下見へ出かけた日から、孝子は眠れない日が続いていた。土だの石ころだのを相手にしてきたとはいえ、智之のあまりの社会性のなさに、胸の中は戸惑いと焦燥が渦巻いていたのだ。すでに会社は退職し、出社最後の日には祝いの席まで設けてもらっている。引き返すことはできないと、知らぬ間に幾度かため息をついていたのだろう。

「どうかしたの、ため息ばかりよ」

並んで食事の後片付けをしていた淑恵にそう問われた。とつさに別にと答えたものの、そのまま飲み込んでしまうには孝子の不安は大きくなりすぎていた。淑恵の笑顔に誘われて、気がつくつと、それまでの心細さを吐き出していった。

「贅沢なんじゃない」
腹立ちを含んだ物言いだった。息を呑む孝子に、さらに強い口調で淑恵は続けた。

「学者だもの、そんなものでしょう、真面目そうだし。皆が映画のような恋をするわけじゃないわ。……うちの人の顔を潰さないでね」

忘れていたわけではなかった。見合いは兄の上役からの話であった。ひよんなことで孝子が当の上役の目に留まり、それからとんとん拍子に決まったことだった。だからこそ、孝子の胸は重苦しく、もう後戻りできないという重圧で眠れなかったのだ。

「孝子さん、七月で三十でしょう、どんどん難しくなるわよ。それに、いつまでもこのままっていうわけにもね……」

次いで出た淑恵の、最後の言葉の含む意味合いに、孝子は腹の中であっと声を上げた。自分はこの兄嫁にとり迷惑な存在であったのだ。考えてみるまでもなくそれはそうだろう。それまで気づかなかった自分は迂闊であったし、気づかせなかったのは兄夫婦の心配りであったのだと、その場から消え入りたかった。孝子の気持ちの切り替えは早かった。戻れないなら進むまでである。どうにかなるだろうと腹をくくった。漠然とした不安は頭の隅に押しやった。

あの夜から、三十年近くが過ぎた。

忍び足で居間のドアの前に立った。

歌が終わり、孝子がドアノブに手をかけたとき淑恵の満げな声が聞こえた。

「初めての、家族だけのクリスマスね」

早くケーキを切つてよという子供たちの声に、兄の、淑恵の笑い声が重なった。あれ以来、淑恵のあら来たの、というなんでもない一言で孝子は足が竦んだ。

隣家の犬の吠え声が聞こえ、孝子はまたそそくさと衣類を鞆に詰め込んだ。身の振り方が決まるまで、頭を下げて兄の家に置いてもらうほかはないのだ。玄関の三和土に立ち、辺りに一瞥をくれただけで家をあとにした。

電車はそれほど込んではいなかった。

隅のほうに座り、ぼんやりと降り降りする乗客を眺めていた孝子は、前の席に座る幼女の得意げに読み上げる駅名が、乗り継ぎ駅から二駅も過ぎていくことに気づき慌てて腰を上げ、またゆつくりと座りなおした。ドアが閉まり、電車が動き始めた。祖母であろう自分と同じ年ごろの女が目を細めて幼女を見ている。もし智之との間に子供がいたなら、あんな穏やかな顔をして過ごす日もあったのだろうかとの思いがよぎった。孝子の視線に気づいた女が、孫の愛らしさに同意を求めするように孝子に微笑みかけた。笑みを返そうとして、頬が強張った。幼女が次の駅名を読み上

智之は酒も煙草も賭け事もやらない。女に走るわけでもない。決まった時刻に出かけ、ほぼ決まった時刻に帰る。年金生活に入っている同年齢が多い中で、いまま給料はきっちり銀行に振り込まれる。持ち家は新しい外壁を得て立派さを増した。何の不足があるのか、今度も淑恵はそう言うだろう。白いタオルを持ち出しても、何をいまさら世迷い言をと相手にされないだけである。子供がいらないからいつまでも大人になれないのね、となるだろう。深いため息が出た。女三界に家なしとは誰が言ったのだろう。そもそも自分に家はあったのだろうか。孝子は思う。あらためて考えたことなどなかったが、結婚が決まるまでは兄の家族と暮らす家がそうだと信じていたはずだった。可愛い盛りの姪や甥は孝子ちゃんと呼んで甘えてくれた。淑恵にとり自分が異物であったと気づかされたときから、わだかまりが生じたのだ。それを確信させたのがあの夜だった。

結婚して家を出てから初めてのクリスマススイブに、孝子は姪や甥を喜ばそうとそれぞれへのプレゼントを携えて兄の家を訪れた。次の日に行くといってあったのが、智之が何かの集まりで遅くなることから、急に思いついてのことだった。家の呼び鈴を押そうとしたとき、中からクリスマスソングが流れてきた。孝子がいたころからこの歌を歌いケーキにナイフを入れていたことを思い出し、びっくりさせようとたまたま鍵の掛かっていた玄関から入り、

げて孝子は立ち上がり、女は一瞬怪訝そうな顔をしたがまた孫に視線を移した。孝子は惨めだった。自分の足で歩くと決めたばかりというのに、このざまはなんだ、もう自分の心はささくれ立ってしまったのか。駅のトイレに入り、鏡を見ながら、しつかりしろと呟いた。

兄の家の前に立ったときにはすっかり暗くなっていた。街灯と門燈の明かりをうけて、手入れの行き届いた庭が浮かんでいた。真っ赤な鶏頭は淑恵の好みだろう。ハナミズキやツツジは苗木のときから兄が丹精してここまでにしたものだ。兄が植えているのを眺めながら、なんて貧相で見栄えのしないものを買ってきたのだろうと孝子は思ったが、いつのまにかそれらの木は見劣りするどころか、堂々と古い小さな家の貌になり、風格さえ漂わせていた。ささやかな幸せを大きく膨らませて穏やかな老後を送っている兄たちを、煩わせようとしていたことに気づいた。甘ったれ。後ずさりしながら、家を離れた。

少し前まで酒屋だった場所に、コンビニエンスストアが建っていた。強い光の下、似通った風体の若者たちが出入りしていた。ビジネスホテルのベッドに座り、これからのことを考えた。若くも特技もない自分に明るい見通しなどあるはずもないが、それでも、智之のもとに戻るつもりはなかった。財布の中に目を落とし、心細い中身に自分名義の貯金はしておきなさいねと言った淑恵の言葉が思い出さ

れた。どっちの名義だって同じじゃないかとおろそかにしていたことが悔やまれた。離婚にあたり、どれほどのものが孝子の権利として認められるのかは弁護士に聞くにしても、これからの自分に何ができるのだろうか。

三日間があつという間に過ぎた。

この間に、弁護士に会い、ハローワークを訪ね、区役所からは離婚届の用紙をもらってきた。弁護士によると、離婚は孝子にとりかなり不利になるだろう。公平に判断して、智之に際立った非は認められない。そうになると、現実問題として、智之が了承しないかぎり十分な金額を孝子が受け取るのは難しいということだった。弁護士は言葉の端々に思いとどまった方がと匂わしていた。ハローワークの方はもつと露骨であった。孝子が大学教授の妻と知ると、ほとんどあちらを向かれた。

「奥さん、世の中はそんなに甘くないですよ。こう言っただけですけど、ぬるま湯に浸かっていたような人が生きていくのは並大抵のことじゃできないですよ」

どうしてか、言葉の端々に敵意すら含まれているように感じられ、孝子は目の前の初老の男の顔を眺めた。小さめの眼鏡の奥で細い目が、いい気なもんだと言っていた。それでも、病人の付き添いをしながら息子を育てたという町内の老婆の話を思い出し、はすかいに座ったまま皮肉な態

度を崩さない相手に、付添婦や家政婦の口を探してくれるように頼み込んだ。誰に言われるまでもなく、馬鹿げた行動を自分とはとっているのだ。頭を下げ智之の嫌みを受け流し、あとは、腹の中であかんべをして暮らすのが分別というものだろう。

だが、周りもつともらしく意見を言えば言うほど、孝子の中から「違う！」という叫びが聞こえてくるのだ。かつて腹が決まった。

四日ぶりの玄関に立った。開けたての少なかった家の中はひっそりと、空気は重く湿っているようだった。智之の靴が孝子のサンダルの上に乗るようになってしまった。鎌倉へ出かけた際に孝子が揃えておいたものだ。足の先で隅のほうに押しやった。それにしても智之が帰宅する時間ではない。わざわざ自分で他のを下駄箱から出し履いていたのか、智之が。おかしなこともあるものだと思いつたのか、中へ入った。ガラスの器に入れて窓辺に飾ったガラスの首はうなだれ、器の中の水は腐りかかった茎で濁っていた。テーブルの上には中身の半分以上残った弁当がらうが、それにしても、孝子はおかしくなった。結婚してからの智之はほとんど自分で買い物などしたことがないのだ。ましてコンビニで弁当とは。孝子が留守をするときに

は、幾種類かの惣菜を作り冷蔵庫の中に入れておいた。食べる順番が分かるようにと番号もふっておくのだから、孝子が鎌倉へ呼び出されたときも、智之が言うほど食べることに關しては不自由していなかったはずだ。今度は予期せぬ留守にさぞや困り果てたであろう。腹立ち紛れに、買った弁当を途中で放り出した智之の顔が浮かんだ。

智之との話し合いと平行して荷造りを始めておいたほうがよいだろうと、孝子は二階へ上がった。タンスを開けてガタガタしていると、隣の寝室から、小さく咳が聞こえた。手を止めて耳を澄ますと、今度は涙をかむ音がする。襖を開けた向こうに、智之が掛け布団を口元まで引き上げて臥せていた。頭の周りには使い捨てたティッシュが散乱し、足下にはパジャマが脱いだ形のまま転がっている。

「…風邪？」

「……」

「いつから、熱は？」

相変わずのだんまりに、いままらこんな質問馬鹿げていると部屋を出かかったが、智之の顔色の悪さに孝子は足を止めた。瞼の下には太い隈ができ、全体に土気色をしている。布団の間から見えるへの字も力が入らないのか、中途半端なへの字なのだ。中途半端なへの字は泣いているように見えた。病院へ行ったのと聞こうとして、ちり紙の下から葉袋が見えた。病院へ行ったのなら、あとは養生だ

けである。智之がかすれた咳をひとつとして、孝子は話し合えるようになるまで智之の世話をすることにした。武士の情けである。

散乱したものを片付け、新しいパジャマと下着を智之の横に置き、粥を作った。

「お粥食べる？」

返事はなかった。梅干、鮭の切り身、卵の焼いたのを沿えた粥を盆の上に乗せ、智之の枕元に置いて部屋を出た。近くのスーパーまで買出しに行き、肉や魚を冷蔵庫に収めたあと、二階へ上がった。智之は粥にも他のものにもいっさい箸をつけていなかった。予想がついていた。そんなところだろう。智之の幼児性は年季が入っているのだ。俺は怒っているんだからなという姿勢を、そう簡単に崩すわけにはいかないのだ。どんなに馬鹿げて見えようとも、智之にとっては大事なことなのだ。こういうとき、何か言うだけ逆効果になる。孝子は黙って盆を下げ、食事時になると、また新たな盆を持って上がった。それが数度続いたころ、孝子の尻が落ち着かなくなってきた。水くらしいは飲んでいられるだろうが、飲まず食わずでは体力が消耗するばかりだ。直るものも直らなくなる。病人にはどうかと思うが、孝子は智之の好物である豆のカレーを作り始めた。にんじんを刻みながら、何をやっているのだと孝子は自問していた。腹が立っていた。何も口にしない智之のどうしようもない

頑固さを怒っていた。だが、もしかしたら、食べないでどうする、肺炎にだつてなるかもしれないじゃないかという心配から、自分は腹を立てている。そう孝子は気づいていた。いかに馬鹿げている。こうしてにんじんを刻んでいるのもどうかしている。水を流しながらまな板を手荒く洗った。

カレーを置いてきてから、小一時間はたった。

智之はカレーを食べているだろうか。階段を上がりながら、もし食べていなかったら、これまでになるだろうと孝子は漠然と思っていた。孝子の忍耐も限界に来ていた。

智之は手をつけていなかった。孝子の体が震えた。盆を引つつかみ、智之の布団の上にひっくり返すと同時に大声を挙げていた。謝るつもりも、やり直すつもりもない。自分は離婚しようと帰ってきた。帰ってきたら倒れていたから、長年一緒に暮らしたよしみで、最後の世話をしよう、まともに話ができるようになるまで待ってやろうと思っただけだとまくし立て、引き戸を音を立てて閉めた。

カレーはひなげし柄の布団に飛び散った。

智之はバネ仕掛けの人形のようにボンと上体を起こし、鳩が豆鉄砲を食らったという表情をしていた。居間の椅子に体を預け、孝子はほんやりとしていた。怒りはおさまっていたが、けだるく、荷造りをするのも億劫だった。少しして、智之が二階から降りてくる足音が聞こえた。用具入

れの戸を開け、また階段を上ると、二階の風呂場から水音が聞こえてきた。用具入れからバケツと雑巾が消えていた。信じられないことだが、智之は布団にぶちまかれたカレーの後始末をしているらしい。二、三度水音を立てたあと、

智之は二階から降りてきた。台所へ行き、カレーをよそい、背を向けて食べ始めた智之を孝子は見ていた。うつむきかげんの背中では、一回りも小さく見えた。智之は黙って食べ続け、孝子も黙ったまま見ていた。時おり、カチンとスプーンの皿を打つ音が聞こえていた。

「ありがとう……うまかった」
背を向けたままこう言い、空になった皿を台所にさげる智之を見ながら、智之のたつた今言った言葉を孝子は繰り返していた。

ありがとう、うまかった。ありがとう、うまかった。胸の中を温かいものが広がっていった。三十年もかかったけれど、やっと聞くことができた。孝子は思った。智之は、そのまま二階へ上がっていった。たつた四日で智之はしおたれた老人になっていた。力が入らないのか背をまるめゆつくりと歩いていった。パジャマのスボンの裾がたくれ、足が覗いていた。めつたに陽に当たらないそれは生氣のない白さでござつと、爪は白濁し、十分に年寄りだった。なんだか笑いたくなってきた。智之にしたなら、なんとすさまじい四日間だったことだろう。孝子に思いつきりひっぱた

かれ、風邪を引いて熱を出し、布団にカレーをまかれ、こういうのをなんて言うのだろう。泣きつ面にカレーだと、孝子は一人で笑っていた。笑いながら、ありがとう、うまかったと、まだ耳に残る智之の言葉をなぞっていた。布団に入つてしばらくすると、隣の寝室から智之が話しかけてきた。

「鎌倉には、もう行かなくていいから」

精一杯に考えた末の言葉なのだろう。鎌倉だけのことじゃない。そんなのはほんのほんのかけらだ。智之には言っても分からないだろう。そう思いながらも孝子の目から涙が滲み枕へ伝っていった。

その夜半だった。うめき声が聞こえたような気がして、孝子は目が覚めた。襖を開け智之に声をかけたが返事はなかった。すでに智之の意識はなかった。救急車を呼び、病院へ着くなり智之は集中治療室へ運ばれた。医者に脳幹出血と診断され、状況は非常に厳しく一両日がやまだと言われながら、孝子は口を開くことができなかった。

治療室では出血が止まるかどうかを黙って見ているのだろうか、町内の老人が脳出血と診断され緊急手術をして助かったとか、それでもだめだったとか聞いたような気がするが、智之は手術も受けられないのだろうか、なぜだろうと、切れ切れの思考が戻ってきたのは、治療室近くの待合室の椅子に座つてしばらくしてからであった。

「鎌倉には、もう行かなくていいから」

昨夜智之が最後に放った言葉である。あの鎌倉での一連のことをおもんばかつてのことだったのだろうが、智之はそのまま眠りにつき血管が切れたのだ。意識が戻れば、と医者が言ったような気がするが、今どこかをさまよっている智之はそのとき、何を思い浮かべるのだろうか。鎌倉の家ののだろうか、布団の上に投げ捨てられた黄色いカレーライスなのだろうか。

ばね仕掛けの人形のようにボンと上体を起こした智之は、いまは横たわっている。

目の前の壁がほんやりとゆがみ、孝子は涙をぬぐった。

窓からの朝の光が待合室前の廊下にも伸びるころ、孝子は医者に呼ばれ集中治療室へ入った。まだ予断は許さないが、ひとまず安心してよいでしょうという言葉に孝子はほっとし、思わず元のようになれますかと聞いた。が、医者の顔を見て自分が見当違いのことを言ったのだと気づかされた。退院できるのはまだまだずっと先になるだろう。退院してからも、話すことも歩くことも感覚が戻るのも、時間とりハビリにより少しずつ良くなることもあるという程度のもので、期待し過ぎない方がいい、命が助かったのがご主人の強運だったと思ってくださいと医者は言った。

一旦家に戻り、次の日病院へ持って行くものを入れようとして孝子は兄の家へ向かうとき携えた鞆を引き寄せた。

中に入っていた自分の衣類を取りだそうとして、底にある離婚届に気がついた。勢い込んで動き回った数日が思い出された。あれから幾日も経った気がした。自分の名前を書き込んだ離婚届をしばらくのあいだ見ていた孝子は、ゆっくりとそれを破りゴミ箱へ捨てた。

久しぶりに寝室に布団を敷いて横になった。智之がいけないというのに、気がつくとも、真ん中ではなくいつもの孝子の場所に寝ていた。カレーの匂いがする。智之の布団はクリーニング店へ出すため階下へ置いてある。畳の拭き掃除が不十分なのだろう。孝子の口からため息が漏れた。病気との付き合いは長丁場になるのだ。あの智之に、リハビリという忍耐のいることができるだろうか。これから智之と自分との新たな戦いが始まることになるだろう。これが自分の役回りなのだ。世話をする者とされる者。どこまでいっても自分はされるほうにはまわれないのだ。氣遣われることも、優しく扱われることも、それは自分ではない他の人が受けることなのだ。孝子は思った。

天井に、いつものように二本の線が見える。線路は続くよどこまでも、野を越え山越え谷越えて…… ゆっくりと声に出して歌ってみた。これからも、おしまいのテキサス決死隊まで元気に歌えるのだろうか。二本の線の先は闇に吸い込まれている。あの見えないところには

何があるのだろうか。明日の朝見てみよう。ありがとうと、智之は言った。



大重道子著
萩原朔太郎論
—その芸術上詩的アナキズム—

「注文は、03・3334・6161（大重）まで」

西田書店刊 税込一六〇〇円

大重道子 萩原朔太郎論

〈生を懐懐する心〉と〈生を厭ふ心〉
その合作と二律背反

現在までの萩原論は、その論にもなり得ない。
本書は、その心を探る、その心を探る、その心を探る。
そのアナキズムを論ずる、そのアナキズムを論ずる、そのアナキズムを論ずる。

受賞の言葉

榎木啓子

嬉しいお知らせをいただいたのは検査のため入院している病室でした。お仕着せのパジャマ姿でかしまつてうけたまわりながら、これほど好ききわまる時に、最大の喜びしき日に、なんとしまりのないことかと、いつもどこか漫画的要素が内在せねばことのおさまらない我が身が少々恨めしくもありました。

『線路は続く』がどのように評価されるのか、文学的にはどうなのであろうと、原稿が私の手から離れポストに吸い込まれる瞬間、祈るような気持ちでおりました。

ですから、このたび賞をいただいたことは言葉には言いつくせない喜びです。

出来不出来にかかわらず自分の書いたものは我が子と同じ。どれもこれも可愛いものですが、今回の『線路は続く』は私にとり特別な子でした。「あれは、ビルだ」から始まり、「ありがとうと智之は言った。」の終わりまで、一字一句、精魂こめて書きあげました。「書き手なら誰だつてそうだよ、何を今さら」とお叱りを受けるでしょうが、自分の書いたものにそれほど執着することは愚かしいと重々承知しながらも、このたびの受賞がどれほどの勇気を私に与えてくださったことか、感謝に堪えません。



前回の優秀賞をいただいた時のように家族でわあわ喜び合うという図はありませんでしたが、病室の薄い枕を抱きしめながら、頭に染みついております「あれはビルだ」からの数行をつぶやいておりました。選考委員の皆さま、ありがとうございました。

榎木啓子

ゆぎ けいこ

北海道、滝川市に生まれる
大学を卒業後、航空会社勤務
現在札幌市在住、主婦
道新文化センターの藤原ていさんのエッセー教室、朝倉賢先生の小説教室、菊地寛先生のシナリオ教室で学ぶ

- 「河の会」同人
- 2004 第1回「北のシナリオ大賞」受賞
- 北海道放送（HBC ラジオ）にて2005年3月21日放送
- 05 第2回「銀華文学賞」奨励賞受賞
- 06 第3回「銀華文学賞」優秀賞受賞
- 09 第6回「北のシナリオ大賞」受賞
- 2010年3月放送予定